エンタ目

仙頭 武則

■「ユリイカ」完全版

亡き監督にささげる上映

今年三月二十一日に五十七歳で逝去した青山真治監督の代表作『EUREKA／ユリイカ』が七月二十九日から名古屋市中区のセンチュリーシネマで上映される。デジタル・マスター完全版の初公開。上映時間三時間三十七分、モノクロ、シネマスコープと全てが型破り。私のプロデュース作だ。他紙の追悼文に青山監督と私の関係を「上下を自由に入れ替わり、横にも並ぶ天下無比の『兄弟』」と記した。その存在の喪失感は今も消えることは皆無だ。

二〇〇一年の公開時、評論家の浅田彰氏は「映画の二十一世紀は『ユリイカ』をもって始まる」。音楽家の坂本龍一氏には「久しぶりに才能が露骨にむき出しの映画を見た」と称賛され、二〇年に発表された英国映画協会（BFI）「一九二五年～二〇一九年各年の最も優れた日本映画」では「東京物語」（一九五三年）「七人の侍」（五四年）と並び二〇〇〇年のベスト作に、国内でもキネマ旬報〇〇年代十年間で公開された全作品から第二位に選ばれた。回顧を経て、評価は国内外で不動のものとなったと自画自賛しておきたい。

いち早く東京では五月十三日に公開。連日多くの観客で劇場は埋まり、二週間予定の興行は四週間に延長された。

名古屋上映のチラシ

劇場の方から「エンドロールが終わると毎回のように客席から拍手が起こっていますよ」と連絡を受けたときは目頭が熱くなった。その拍手はきっと青山監督にも届いている。

公で彼のことを話すと取り乱し、不体裁をさらすと舞台あいさつなどは遠慮してきたが、大学の教え子でもあるセンチュリーシネマ支配人に背中を押され、初日から三日間、トークを了承した。

ダグラス・サーク『翼に賭ける命』（五七年）にある一節「人は忘れ去られるまでいつまでも生き続ける」を糧に、観客の皆さまにお話しすることで青山監督が生き続けられるようにしたいと思う。

（名古屋学芸大教授、映画プロデューサー＝次回掲載は七月二十八日）